

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

祖父が教えてくれたこと

北海道 長沼町立長沼中学校 二年 池亀 廉

私の祖父は、仕事を定年退職し、羊蹄山のふもとの真狩村に自分の手で小さな家を建てた。自分が幼かった頃のように、不便だが静かな生活を楽しみたいという理由だった。その家は、森に囲まれた中に、ぼつんと一軒建っている。電気も水道も通っていない。祖父は、歯磨きも洗面も料理も食器洗いも、キャンプで使うコック付きの水タンクから水を出して使っている。でも、そのタンクの水は、車で十分ほどかけて羊蹄山の湧き水をくんでくるのだ。毎日、四リットルのボトルを十本ほどくんできて、それを様々な用途に使っている。

私は小さい頃から、祖父のその家によく遊びに行っていた。中学生になって行った夏の日のことだった。手洗いのとき、つい普段の癖が出て、水を出しっ放しにしてしまったのだ。祖父はこう言った。

「じいちゃんの水は貴重なんだぞ。そんな無駄な使い方をしたら、すぐなくなってしまうよ。」

祖父の家の水には、限りがあるのだ。祖父に言われて、初めて自分の水への意識の足りなさに気がついた。

改めて考えると、これまで私は、何も考えることなく自由に水を使っていた。確かに水の使いすぎで家族に注意されることもあったが、言われても直そうとはしなかった。水は、蛇口からいくらでも出てくるものだと思っていたからだ。手を石けんで洗っている間も、シャワーで頭を洗っている間も、水はずっと出しっ放しで、たくさん水を無駄遣いしてきた。気になったので、普段使う水の量を調べてみた。すると、手洗いで、蛇口から出しっ放しの水は、一分で十二リットルにもなること、シャワーも三分で三十六リットルもの水が出ること、お風呂の湯船には大体百八十リットル、トイレの水を一回流すのに十三リットルも使うということがわかった。

祖父の家では、こんな水の使い方は当然できない。使いすぎると、あ

つという間に水はなくなってしまう。祖父は、生活するのに必要最低限の水を使うのだ。貴重な水だからこそ、祖父はその大切さを十分知っている。水がなくなれば大変なことになることも。だから、限りある水で、それに応じた生活を送っているのだ。それでも祖父は、遊びに来る私たちのために水洗トイレを作ってくれた。でも、トイレを使うたびに、くんできた貴重な水をトイレタンクへ相当足さなければならなかったのだ。水を無駄にしてきた私は、そこまでしてくれた祖父に申し訳ない気持ちになった。心から水を大切にしようと思決した。

「富士山の雪解け水は、二十年もかかって地上に湧き出てくるという話を聞いたことがあるよ。羊蹄山の水も、長い年月をかけて湧き水になってくるのだろうね。」

と祖父が教えてくれた。長い年月をかけてやっと私たちに届く水。その水は私たちの暮らしを支え、命をも育むものだ。決して無駄にしてはいけないものなのだ。

水は、貴重な贈り物である。祖父の、水を大切に生活に触れたことで、今では、水を節約したり、流す水も汚さないよう気を遣うなど、率先して水を大切にしていけるようになった。水は、決して無限にあるものではない。現に水の確保に苦労し、そのために命をも脅かされている国もある。この日本も、遙か昔から、水を守るための果てしない努力により、今の豊かで恵まれた水があるのだ。そのことを忘れてはいけない。私たちは、もう一度水を大切に生活に戻らなければならない。祖父の暮らしは、それを教えてくれた。

祖父は、最近、雨水を集めてトイレタンクに流す仕組みを作った。祖父らしい、水を大切に工夫だ。私も祖父にならば、この自然からの贈り物である貴重な水に感謝し、水を大切に生活を送っていききたい。